

# 日英会話における思考動詞を用いた引用について

Quotations with *think*-verb in Japanese and English Conversation

野村 佑子

NOMURA Yuko

[要旨] 引用とは「ある場で成立した言葉や思考を、現在の語りの場に引いてくることである (鎌田 2000)」であり、引用されるコンテキストと引用するコンテキストという二つのコンテキストが一つの形式に存在する構造をなしていると理解されている。これまでの引用研究では、引用の構造や引用形式に焦点が当たっており、引用される内容は注目されてこなかった。また、日英語を比較対照する試みはまだ少なく、特に自然談話の比較によって、両言語における引用の差異を明らかにする試みは限られている。そこで本研究は、日英比較可能な自然談話をデータとし、引用内容に焦点を当てる。その際、思考動詞「思う」*think*を伴う引用に限定した。分析では、日英語では引用の頻度が異なり、日本語のほうが頻度が高かったこと、また引用内容には、①対象 (出来事・人物) に対する判断、②対象 (出来事・人物) に対する評価、③疑問・疑念、④感嘆、⑤意思・目的・理由などの5つがあり、②④⑤は英語データでは見受けられなかったことを示した。また、この結果を引用の構造の観点から再解釈し、日本語話者にとって引用が、引用されるコンテキストと引用するコンテキストを行き来する方法の一つであることを考察した。

[キーワード] 思考動詞を用いた引用、引用の構造、引用内容、日英談話対照研究

[Abstract] Quotations are defined as an act to insert utterances or thoughts from one context into a context currently being engaged (Kamada 2000). It is believed that the quotation has at least two contexts, quoted and quoting contexts, in one sentence. Previous studies on quotation mainly focuses on its structure and grammatical features. Contents that are quoted have not been investigated. Comparative studies of Japanese and English quotations are still limited. Although some researchers have attempted to clarify the difference between them, it is clear that further investigation is required. This study employs comparable data of Japanese and English conversations and analyzes quotations by focusing on quoted contents. Among some quoting verbs, this study examines *think*-verbs *omou* (think) and *think*. The results show that Japanese speakers use many more quotations than English speakers, and that the quoted contents can be classified into five categories; 1) judgement on the target (event/people), 2) evaluation on the target (event/people), 3) question, 4) exclamation, and 5) intention/purpose/reason. Categories 2), 4), and 5) are not found in English conversations. This finding is discussed in terms of quotation structure. As a result, this paper suggests that Japanese quotation are interpreted as one of the resources for speakers to move back and forth between quoted and quoting contexts.

[Key Words] quotation with *think*-verb, structure of quotation, quoted content, comparative studies of Japanese and English

## 1. 序論

引用はどの言語にも存在する現象として、様々な言語研究の中で多角的に研究されてきた。ところが、これまでの研究は形式を軸としていることが多く、何が引用されるのか、という引用内容はあまり注目されてこなかった。これは、直接引用・間接引用という大別を持つ西欧言語の引用研究の中では、その形式に関する記述が重視されていることによると考えられる。ところが、実際に、日常会話を観察すると、日本語話者同士の会話では、「思う」を用いて心内の発話を引用する場合が多くみられ、「引用」と耳にして思い浮かべる「～と言っていた」「～と説明した」など発言を引用する以外の引用があることが明らかであり、引用研究の深化に向けて、引用内容にも注目する必要があると言える。また、日本語の引用を、西欧言語の引用研究の枠組みを当てはめずに再解釈することで、より正確な記述も可能となると考えられる。本研究は、日英語談話データを用いて両言語を比較し、その違いを明らかにするとともに、引用内容へ着目することで引用を新たに解釈することを目指すものである。

## 2. 先行研究

### 2.2 引用の定義

引用とは「ある場で成立した言葉や思考を、現在の語りの場に引いてくること」である（鎌田2000）。つまり、ある場で話者が何かを述べるまたは思う、というコンテキストと、話者がそれを現在に引いてくるコンテキストとの二つが、引用という一つの形式に含まれているという特徴があり、中園（2006）によれば、引用の構文は「引用部（quoted part）」+「伝達部（quoting part）」から成る。したがって、引用は一つの構文に二つのコンテキストが存在し、さらに、この二つのコンテキストに対する伝達者の解釈も反映された言語形式である（図1）。

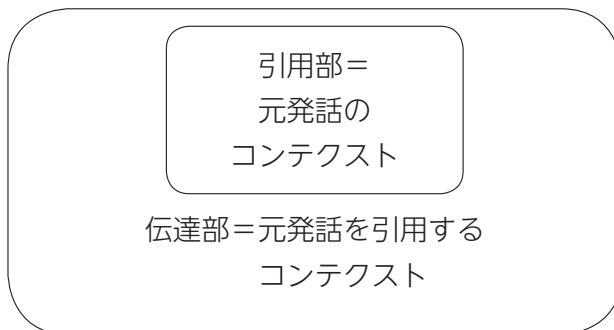


図1 引用の構造

引用は、あるコンテキストで起こる発話が、話者がそれを伝達するコンテキストへ引用されるときに、伝達者がどのように伝達したいかという、伝達者の意図や気持ちも表現されると考えられ

ているのである。

### 2.3 日英語の引用

引用に関する日英対照研究は、主にその文構造の違いに焦点が当たってきた。例えば、中園（2006）は、太郎という人物が聞き手に対し、その賢さを感嘆の意を込めて述べる場合を具体例とし、日英語では引用部の主語が異なることを指摘している。

(1) a. Taro “You(i) are very clever!”

b. Taro(t) said I(i) was very clever.

(2) a. 太郎「君(i)はとっても偉いなあ！」

b. ?太郎(t)は 私(i)はとっても偉い と言った (中園 2006:214,215)

(1a) および(2a)は、太郎という人物の発話である。これを引用するとき、英語ではyouはIへ調整され、(2b)が成立する。しかし、日本語では英語のように「君」を「私」へと調整すると、太郎=私という解釈も可能となり、(2b)必ずしも(2a)を表さない。つまり、この例の場合は日本語ではダイクシスの調整が必要とは限らない。中園(2006)によれば、このような「感嘆」という発話行為におけるダイクシスの調整に関する両言語の違いは、どのような制約が優勢なのかに関係するという。英語の場合には構造的制約が機能的制約よりも強く、日本語はその逆となっている。すなわち、感嘆するという発話の機能が重視されるならばダイクシスの調整は必要でなく、形式上の規則に従うことが重視されるならばダイクシスの調整が必要となるのである。また、引用形式に関する全体的な傾向として、日本語の引用のほうが英語の引用よりも、直接引用形式と間接引用形式の境界が緩やかであるとされている(鎌田 2000など)。

文構造以外の違いについての研究はまだ少ないが、野村(2007:2015)は、日英談話データの比較によって、引用の頻度が異なり、また引用内容と引用動詞にも異なる傾向があることを示している。野村(2007)は、キャラクターが描かれ、せりふのない15枚の絵カード<sup>(1)</sup>を説明する語りデータの観察から、日本語母語話者の引用はおよそ7割が思考動詞「思う」を伴う形での、キャラクターの心内の思いを語りの場へ引用するものであり、英語母語話者の引用はおよそ7割が伝達動詞sayなどを伴う形での、キャラクターの発言を語りの場へ引用したものであることを明らかにした。以上から、引用という一つの現象であっても、日英談話では異なる傾向がみられることが分かった。

### 2.4 談話における引用の表現性・効果

コミュニケーションにおける感情表出の側面に着目した研究の中で、引用形式を取り上げているものがある。これらの研究は、いわゆる直接引用の形式のみに着目したうえで、引用形式には話者の感情的態度を伝達する機能があると指摘している(Besnier 1992, Fujii 2006など)。例えばBesnier(1992)は、次のような報告をしている。ツバルのヌクラエラエに住む人々は、主観的な感情を表現する際には、話す速度が速くなり、ピッチは高く、感情的な音調になるが、信頼

ある大人は感情を出さず冷静であることを社会的規範とするために、感情的態度は引用形式で表現するという。つまり、引用部で音声的な特徴を表すことで、現時点での話者の直接の声ではないことを含意するのである。

## 2.5 先行研究のまとめと本研究の目的

これまでの引用研究は、引用構造を記述し、また日英対照研究の中では、引用の形式を軸として研究されてきた。談話研究においては、異言語を比較するものはほとんどなく、会話で使用される直接引用の効果などを明らかにするに留まっている。引用の定義や構造は幅広く援用可能であるものの、直接引用と間接引用という大別を前提とする西欧言語の形式に関する解釈が日本語にも当てはめられていると言える。ところが、日英談話の比較からは、両言語における引用の異なりは、形式を越えて、頻度や引用に用いる動詞にも至っていることが分かってきている（野村2007:2015）。したがって、引用という現象が両言語に存在するものの、かなり性質が異なる可能性があるが、この点は見逃されたままである。

これを受けて、本研究は、日英語の引用について、形式ではなく、引用内容を軸に観察し、その違いを明らかにすることを目的とする。なお、ここでは、野村（2007:2015）で示されたように、日本語には思考動詞を用いる引用が多いことに着目し、思考動詞「思う」を伴う引用と、英語の思考動詞thinkを伴う引用に焦点を絞る<sup>(2)</sup>。

## 3. 分析方法

### 3.1 データ

本研究は、「ミスターオーコーパス」の一部を用いる<sup>(3)</sup>。このコーパスは、異言語・文化比較のため、いくつかの言語の母語話者による談話を同一の環境下で収録したものである。ここでは、日英語母語話者（女性）2人一組で行われた、およそ5分程度の会話（日本語26会話、英語22会話）をデータとする。会話者は開始前に、「びっくりしたこと」をテーマとして語るよう指示されている。話者は、主に自分がびっくりした経験を語っている。一方の話者が話題提供者となり、もう一方は聞き手として反応を示しながら聞いている状況である。これは、すべて録画・書き起こしされている。

### 3.2 分析対象（本研究における引用）

本研究における引用は「ある場で成立した言葉や思考を、現在の語りの場に引いてくること鎌田（2000）」である。特に、分析対象としたのは、以下のような思考動詞「思う」thinkが用いられたものに絞る。

(3) 「すごい昔の人だったんだ、私」って思った

(4) They think, “Oh, she’s Japanese.”

「」および“ ”でくくられた部分は、引用部であり、話し手の心の中で発せられた（とされる）発話であり、「って思った」*They think*は被引用部である。話し手は、話題である「びっくりした

こと」を語る中で、時折、このような発話をした。

なお、形式上、引用であるが、命題内容を緩和するための発話 (eg. たぶん歌えると思うんです。I think I was ten.) は、今回は対象としなかった。その選定には、発話内に言いよどみや短い沈黙を伴う、「多分」probablyなどが使用されていることを基準とし、必要に応じて前後の文脈も考慮した。

## 4. 分析結果

### 4.1 全体像

対象とする引用を抽出した結果、日本語会話において133例、英語会話において10例を得た。日本語会話のほうが、英語会話に比べ、「思う」を伴う引用が高頻度で使われることがわかった。さらに、それぞれの引用部の内容を観察したところ、以下のような内容が確認できた。

表1 引用部の内容の種類

引用部の内容	日本語	英語
①対象（出来事・人物）に対する判断	73	7
②対象（出来事・人物）に対する評価	18	0
③疑問・疑念	30	3
④感嘆	7	0
⑤意思・目的・理由など	5	0
計	133	10

#### ①対象（出来事（状況）・人物）に対する判断

その状況において話者が対象に対して思うことを表すもの、または、その状況における話者の心内で発せられた（とされる）発話

(5) そこで私は「なんかあるんだ」と思って

(6) And I thought, "Well, okay, he'll go away."

#### ②対象（出来事（状況）・人物）に対する評価

その状況そのものや、その状況内で起こる出来事、状況内の人物に対しての評価を表すもの（先に述べた「対象（出来事・人物）に対する判断」とも類似するものだが、「すごい」などの形容詞を含むものをここに分類した。）

(7) 「やっぱ、いいなあ」と思いました

#### ③疑問・疑念

話者の疑問や疑念を表すもの、疑問詞、「～か」「～かな」などの疑問形式を含むもの

(8) 「何をするのかなあ」と思って

(9) You're thinking, "What if this happens? What am I going to do?"

④感嘆

驚きを表す短い発話のみ（話者の声の抑揚に着目すると、感嘆を表現している引用部は多く見られたが、上記のいずれかに分類し、ここでは短い発話のみとした。）

(10) 「え？」と思って

⑤意思・目的・理由など

話者の行動の理由や目的を表すもの

(11) 「私もちっちゃく入れよう」と思って

引用部の内容別に観察すると、日本語会話における引用がより多様な内容を引用するものであることがわかる。特に、④感嘆、⑤意思・目的・理由などを引用するものは、英語会話には見られなかった<sup>(4)</sup>。

#### 4.2 引用部の内容に関する日英比較

##### 4.2.1 日英語において類似する事例

①対象（出来事（状況）・人物）に対する判断、③疑問・疑念を引用部の内容とする引用は、両言語で見られた。①の各発話を比較すると、引用部は、語っている場面における話者または別の登場人物が感じた感想を述べている点で日英語で類似している。

(12) 高校生時代の過去を振り返って思ったことを述べている発話

今見たら、メイクとか、もうほんと古すぎて、「すごい昔の人だったんだ、わたし」って思った

話者が、数年前に放映されたテレビドラマを見た際に、登場人物の身なりや化粧が、現在とは異なっていることに驚き、それを表現している。引用部「すごい昔の人だったんだ、わたし」はそのドラマの再放送を見たときの話者の感想を述べたものである。

(13) ある音楽を聴いたときに思ったことを述べている発話

I started listen to some Japanese music and really liking it. And, you know, I heard this music and I was thinking, you know, "I kind of wanna play guitar."

引用部"I kind of wanna play guitar"は、音楽を聴いた話し手の心内の言葉を再現した引用であり、同時に、音楽を聴いた経験に関する話者のリアクションとも読み取れる。

③の発話を比較すると、両言語ともに、臨場感を際立たせ驚きを強調するものとして表すものや、単に疑問や迷いを思考動詞を用いて引用しているものなどがみられた。



- (14) その状況における適切な行動がわからなかったことを述べている発話  
「どうすんのー」とか思って

- (15) 携帯電話にメール機能がついてることを初めて知って驚いたことを述べている発話  
They said, “Oh, yeah, I’ll give you my e-mail and my cellphone e-mail,” and I’m thinking,  
“Cell phone e-mail? {laugh} Okay.”

これらの発話の引用部には、声のトーンの変化がみられ、より臨場感があり、それによって驚きを強調していると考えられる。

また、疑念を吐露するような発話もある。

- (16) 「約束とかしようかなー」と思ったら  
(17) I’m trying to think, “Hmm, I wonder if that’s true.”

これらの引用部では、先に見たような音声的な特徴は見られなかった。

#### 4.2.2 日本語においてのみ観察された事例

##### 4.2.2.1 意思・目的・理由などの引用

日本語会話では、話者がある行動を起こそうとする意思や、その行動を行う目的、なぜそれをするのかという理由を述べる際に、引用が用いられることがあった。(⑤)

- (18) a. さっき「授業の話でもしようか」と思って  
b. 「買い物に行こう」と思って、そこの公園を抜けようとしたの

これらの発話は、「さっき授業の話をしようとして」「買い物に行こうとして」など、「思う」という思考動詞を用いなくても語ることが可能であるが、こうした場合でも、日本語では「思う」を伴う引用で表すことがあるようである。

##### 4.2.2.2 評価・感嘆の引用

日本語においてのみ観察された ②対象（出来事・人物）に対する評価や、④感嘆は、各発話の前後のやりとりも考慮しながら観察すると、話題をより具体化し、詳細な描写を与えていることが分かった。

- (19) Rによるアメリカのレディファースト文化を目の当たりにした話【②の例】

040 R ちゃんとレディファーストで

041 L わあ、すごい

042 R おじいちゃんが、こう、おばあちゃん、帰ってきたときにドアを開けるとか

043 L へえー

044 R そう、車のドアを開けるとか

045 L すごい

046 R そういのはね、すごい、日本とは

047 L 絶対、家では見かけん

->048 R |笑い|ね、そう、それですごいびっくりして、「あ、すごい」と思って

049 L へえー、すごいな

話し手Rは、アメリカでのホームステイ中にホストファミリーの男性（「おじいちゃん」）が女性（「おばあちゃん」）に対し、紳士的な対応をする様子を見て、自身の周りで、特に日本にいる時にあまり見かけない光景に驚いたことを語っている。48行目で、話し手は「あ、すごい」という短い評価的な発話の引用をしている。46行目でも日本とは異なることを言いかけ、「すごい」という語で自身の感想を示したが、48行目で今度は引用形式で繰り返した形である。引用部の短い感嘆詞「あ」は、出来事に対する反応として無意識的に生じる語であり、「すごい」とはその度合いが平均的なものよりも高いことを表す語である。したがって、「あ、すごい」はその場面を目撃した話者が、その状況について思わず驚いた様子を、評価的な発話を引用することで評価の様子を例示している。

(19) Rによるカフェで見かけた女性の話 【④の例】

037 R フロアで

038 L ああ

039 R お客さん、ほかの

040 L あ

041 R なのにその、人、女の人なんだけどね、歯、みがきながらすすすた歩いていったの

042 L え、なん、かっこは

043 R ふつう

044 L え、ちょっと、なに、その人|笑い|

045 R わかんない|笑い|からびっくりしちゃって

046 L |笑い|びっくりする

->047 R |笑い|目を疑った、自分の、「へ」と思って、「なんだ?」と思って

048 L |笑い|それはびっくりだよ

049 R |笑い|でもなんかそんなの注意できないから

050 L |笑い|だよ

話し手Rはアルバイト先のカフェで見かけた女性がカフェの中を歩きながら歯を磨いており、その女性の場にそぐわない行動に驚いたことを伝えている。「目を疑った」という発言で、すでに驚いたことを明確に伝えたが、話者は「思う」を伴う引用を用いて話を続けている。47行目で用



いられた引用部に「へ」という短い感嘆の表現を用いることで、「目を疑った」という、びっくりした様子が具体的に示される。「へ」は、目の前の状況がこれまで想像したこともなかった状況であって、想定範囲を著しく逸脱したため、拍子抜けした様子を表現するものであり、その驚きが深刻なものや心拍数の上がる種類のものではなく、力の抜けるような驚きであったことを表しているのである。さらに、「へ」という一文字の感嘆表現は、「思う」対象とはなりにくく、「思う」を伴って引用されることは、意味上は不自然であり得るものの、他にも「『はっ』とか思って」など、数例見られた。

#### 4.3 分析のまとめ

日英語母語話者による「びっくりしたこと」に関する二人組の会話を観察したところ、日本語会話のほうが英語会話よりも高頻度で引用が観察されること、また、引用部の内容は日本語会話のほうがより多様であることがわかった。引用部が対象（出来事・人物）に対する判断であるもの、疑問や疑念を表すものは両言語に見られたが、対象（出来事・人物）に対する評価、感嘆、意思・目的・理由などの引用は日本語のみに観察された。引用部の内容に着目したことで、両言語に共通する「引用」という現象が詳細には異なる傾向を示していることがわかった。

### 5. 考察 - 思考動詞「思う」thinkを伴う引用の役割とは -

分析では、引用部の内容を分類することで日英語の思考動詞「思う」thinkを伴う引用が、異なる形で使用されることを明らかにした。本章では、引用の構造に立ち返り、この違いを再解釈するとともに、両言語話者にとって、思考動詞「思う」thinkを用いる引用はどのような役割を果たすのかを考察する。

2章で示したように、引用は二重の構造を持っており、一つの形式に対し、2つのコンテキストが存在している。

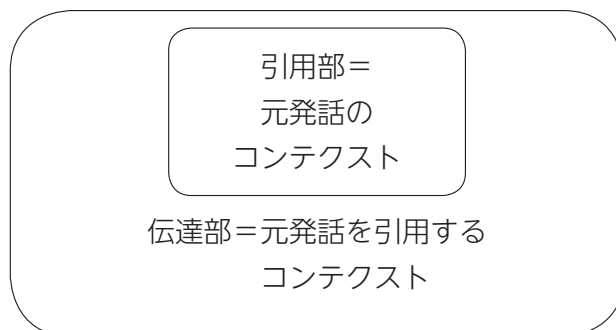


図1 引用の構造

本研究のデータに照らし合わせると、「元発話を引用するコンテキスト」とは、二人の話者がびっくりしたことを語るという場面であり、「元発話のコンテキスト」とは、その語る内容の一部と

なる、話者が経験した場面である。そして、「思う」thinkを伴う引用は、「元発話のコンテキスト」で発せられた（とされる）発話を、「思う」thinkなどを用いて思考したこととして語りの場で再現するものである。日本語においてこの引用が多いことは、英語話者よりも日本語話者のほうが「元発話のコンテキスト」へ直接的に言及することが多いことを意味している。また、その内容も多様であったことから、「元発話のコンテキスト」における、様々な要素をありのままに具体的に語る傾向があると考えられる。例えば、「へ」や「はっ」といった短い発話が「思う」という思考動詞を伴って引用された事例は、その形式そのものはほんの一言の発話を臨場感を持って直接引用した形式だが、「発話元のコンテキスト」で話者が感じた一瞬を「元発話を引用するコンテキスト」へと引き付けたものであるとも解釈できる。思考動詞を伴う引用は、日本語話者にとっては、話者が仮想的に二つのコンテキストを度々行き来するように語る方法の一つであると考えられる。一方、英語話者は、「元発話のコンテキスト」へ直接的な言及はあまり行わなかった。英語話者にとっては、語りの中で時折用いられるものの、必要に応じて発話を際立たせるなどのために用いる傾向が強いようである。

## 6. 結論

本稿では、これまでの日本語における引用研究が、西欧言語において明確な直接引用・間接引用の大別を前提としており、本質的に異なる可能性があるにも関わらず、その点について注目されていなかったことを指摘した。そこで、本研究では、西欧言語の枠組みに捉われず、広く解釈可能な引用の定義（鎌田2000など）をもとに、自然談話データにおける引用の日英語対照研究を行った。特に思考動詞「思う」thinkを用いた引用に焦点を当て、日英語話者が異なる傾向を持って引用を行っていることを明らかにした。日本語の引用の解釈には、新たな枠組みが必要となることも予想される。また、本研究では思考動詞を限定し、またデータにおいても一定の話者層に絞ったが、より幅広く研究することを今後の課題としたい。

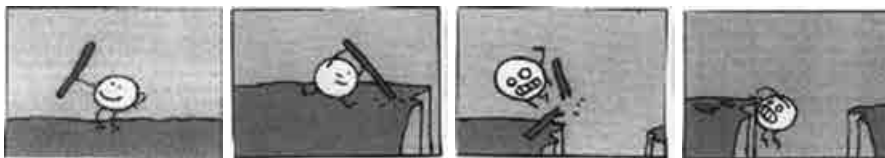
### [参考文献]

- Besnier, Niko. 1992. Reported speech and affect on Nukulaelae Atoll. In J.H.Hill and J.Irvin (eds.) *Responsibility and Evidence in Oral Discourse*. pp. 161-181. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fujii, Seiko. 2006. Quoted thought and speech using the *mitai-na* 'be like' noun-modifying construction. In Suzuki, S (ed.) *Emotive Communication in Japanese*. pp. 53-95. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 鎌田修. 2000. 『日本語の引用』 ひつじ書房
- 中園篤典. 2006. 『発話行為的引用論の試み—引用されたダイクシスの考察—』 ひつじ書房
- 野村佑子. 2007. 「語り手は何に注目するのか?—引用から見る日米語ナラティブ」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』 13: pp.83-93.
- 野村佑子. 2015. 「言語化の対象に関する日英語対照研究—心内状況描写に着目した分析からの一考察—」『言語と人間』研究会6月例会 配布資料

注

- (1) 丸型のキャラクターが崖を渡っていくストーリーである。これを日英語母語話者それぞれが口頭で説明したデータを比較したものである。

絵カードの例 (Lewis Trondheim (2003) *Mister O* 講談社)



- (2) 「思う」と*think*は完全に一致する語彙ではないが、意味内容が類似するものとして本研究では比較を行った。
- (3) 本研究のデータは、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)[課題番号[15320054]「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」(代表者 井出祥子) により、2006年5.6月に収集されたものである。なお、以下の記号を用いて文字化した。?=上昇イントネーション、|laugh| |笑い|=笑いを伴った発話
- (4) 本データにおいては発見できなかったものの、英語にもみられる現象であることを念頭に、多様なデータで観察していくことを今後の課題としたい。

(文学研究科英文学専攻 博士後期課程 2008年度単位取得満期退学)

